

教育支援を視点とした「ゆるスポーツ DeC ʘ」の開発及び利活用に関する研究

鈴木 聡（東京学芸大学健康・スポーツ科学講座・体育科教育分野）

○大鹿 綾（東京学芸大学総合教育科学系）令和3年度のみ

小島大樹（東京学芸大学大学院修士課程・調布市立調布第三小学校教諭）

佐藤吉高（東京学芸大学教職大学院・お茶の水女子大学附属中学校教諭）

松井直樹（東京学芸大学附属大泉小学校主幹教諭）

佐藤洋平（東京学芸大学附属竹早小学校副校長）令和3年度のみ

長坂祐哉（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）

久保賢太郎（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）令和2年度のみ

今井茂樹（東京学芸大学附属小金井小学校教諭）令和2年度のみ

代表者連絡先：satoshi@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】発達障害、ゆるスポーツ、教育支援

1 はじめに

新学習指導要領において、小学校体育科の視点のひとつとして「共生」が挙げられている。一般的にスポーツは、より速く、より強く、より高く、より遠くへという挑戦課題に向かうイメージが強く、そのことが運動嫌い、体育嫌いな児童生徒を育ててしまっている内実も否めない。また、発達障害をもつ子どもたちにとっては、スポーツのルールや制限といったフレームを理解して他者とともに遊んだり運動したりすることが苦手な実態があり、体育科の学習において学習的な課題以外の壁を作ってしまうことがある。一方で、スポーツは誰にとっても楽しいものであり、他者とともに楽しむものである。いつでも、だれとでも、どこでも、いかにようにでも「遊ぶ」ことができる身体や精神があれば、老若男女健障に関わらず、だれもが取り組めて楽しい中身であり文化である。それが実現することが、これからの時代の生涯スポーツの姿といえよう。本プロジェクト研究のリーダーである鈴木聡は、研究室に所属する学部生、大学院生（以下ゼミ生と称する）とともに、2017年度から5か年に渡ってゆるスポーツ開発と実践を重ねてきた。教科教育の研究室ではあるが、教員養成とともに教育支援者育成の視点でアプローチし、教科という枠にとらわれず、子どもたちや教師を支えるシステム開発を目指してきた。つまり、教育支援人材養成と教育支援者と協働できる教師をハイブリッドで養成し、研究室が教育を支援するプラットフォームになることを標榜している。

「ゆるスポーツ」とは、代表澤田智洋氏が主催する世界ゆるスポーツ協会（<https://yurusports.com/>）で展開されているスポーツであり、「苦手な人でも勝てる」「勝っても楽しく負けても面白い」「見ている人も笑ってしまう」というゆるいスポーツを意味しており、スポーツのすそ野を広げることの一翼を担っている。本研究室では、教員を目指す体育・スポーツを専攻する学生が、発達障害に視点を当ててスポーツ開発、展開をするという立場で協働している。研究室で開発しているゆるスポーツを「ゆるスポ DeC ʘ」と称している。「DeC ʘ」とは、「Developmental disorders」「Collaboration」の頭文字であり、多様な子どもがいることを意味する「デコボコ」からイメージしている

2 本プロジェクトの目的

本研究では、このような「ゆるスポ DeC ʘ」の開発及び利活用に関して、教育を支援するという視点から実証的に検討することを目的とした。令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、計画して

いたものがほとんど実施できなかったが発想を転換し、緊急事態宣言、まん延防止等重点措置発令下や、感染症対策を講じての運動実施をせざるを得ない状況の中で、「ゆるスポ Deco」の活かし方を検討、実践した。令和3年度は新しい「ゆるスポ Deco」開発にも取り組み、いくつかのフィールドにおいて対面で実践することができた。

3 本プロジェクトの実施

本プロジェクトでは、「得意な人が上手いかない」「勝っても楽しい、負けても面白い」という発想から様々な新スポーツを開発し活用していく研究を行った。開発と実践は、研究代表者である鈴木と共同研究者、先述のゼミ学生であった。プロジェクトに参画した学生の内訳は以下の通りである。

表1 プロジェクト参画学生の構成

所属	大学院生		学部生			合計
	2年生	1年生	4年生	3年生	2年生	計
令和2年度	6	4	8	8	8	34
令和3年度	4	6	8	8	8	34

<1年次の活動内容>

1年次は、新たな「ゆるスポーツ開発」を実施し、附属学校及び公立学校において実践を行う計画であった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止の対策のため、計画変更を余儀なくされた。計画変更の大きな一つの柱は、小学生にゆるスポ Deco のコンセプトを生かしたスポーツを創る学習を実施し、大学生とコラボレーションしながら新しいスポーツを創ることを試みた。授業実践者は、本プロジェクトメンバーの小島大樹教諭であった。対象は、調布市立調布第三小学校6年生であった。実践にあたっては、鈴木聡研究室所属のゼミ生が関わった。9月に、Zoomを用いて遠隔で「スポーツ創りのレクチャー」を大学生から小学生に行った。その後、6年生児童が15チームに分かれ、総合的な学習の時間等を使ってスポーツ開発を行った。12月に、児童がスポーツ開発・紹介ビデオを撮影および編集しプレゼン動画を作成した。学生はチームごとに担当を決めて児童が作成した動画を視聴し、プレゼンを聞いてアドバイスや監修を行った(図1)。児童はアドバイスを基にして、創ったスポーツを修正してブラッシュアップを重ね実践した(図2)。ゆるスポ Deco のコンセプトを生かしたスポーツを創る活動は、今までの経験から形成された児童のスポーツ観に影響を及ぼし、スポーツの面白さに対して目を向け直す可能性があることが、児童の感想や学びの姿から示唆された。



図1 遠隔でのレクチャー



図2 調布三小での実践



図3 国分寺九小での実践

二つ目の柱は、感染症対策を講じたゆるスポ Deco の実践実施であった。国分寺市立国分寺第九小学校において、2月に実施した(図3)。3密を避け、子どもたちが接触を伴わずに実施できるように内容を修正した。実施に当たっては、協力校の矢島英明校長先生、第1、第2学年担任の先生方に協力いただき、児童の実態を勘案しながら感染症対策を講じる視点を加味しながら実施できたことは、現代的な課題解決に直結し成果があったと考える。

<2年次の活動内容>

2年次の活動は、主に3点から報告する。まずは、東京都スポーツ文化事業団から令和3年度都立特別支援学校活用促進事業の協力依頼を受け、「ゆるスポ DeC 教室」を実施した。場所は都立小金井特別支援学校、実施日は令和3年10月2日(土)13:30~15:30であった。内容は、打ち合わせ、開講式、準備運動、DeC 体験(種目は「清掃寺」「きびーっす」「ようかいランドリー」「サバいばる」の4種目)、整理運動、閉講式、記念写真撮影、反省会であった。なお、実施予定日の2回(7月17日(土)及び2月20日(土))は、まん延防止等重点措置発令中により中止となった。今回は4つのスポーツを全員で行ったが、参加者と大人が同数で一体感があり、大変盛り上がった。参加者の様子からニーズは充分にあったため、今後も東京都スポーツ文化事業団の方々と連携しながら、恒常的にこうしたスポーツイベントを展開していきたい。



図4 都立小金井特別支援学校での体験教室

2022年10月から12月にかけては新作の「ゆるスポ DeC ⑤」の開発を行った。側面に青、黄色、赤、緑の色が塗られた1m立方の段ボール箱25個を置き、4チームに分かれた子どもたちが自分たちの色の面を上側に向けていくもので、「ラン Big キューブ」(図5)と命名された。コンセプトは、SDGsと関連させ、青は水資源、黄色は電力、赤は火力、緑は森林をイメージしている。各チーム一人が箱をひっくり返し、自分の色に一つ変えたら陣地(村)に戻って次の人と交代、時間内でどの色が大きい競うゲームである。いずれの資源も持続しなければならないので色の数を競い合うことについてはストーリーがうまく作れないという課題が残ったが、子どもたちは体中で箱をひっくり返し、走り回って競い合う姿が見られた。



図5 ラン Big キューブ

感染症の状況を鑑みながら、国分寺九小より依頼を受けて1,2年生に対して実践を行った(図6)。実施は、2022年3月7日(月)8日(火)の二日間であった。提供したスポーツは、新作の「ラン Big キューブ」はじめ、「サバいばる」「はこびまシュー」の3種目であった。7日は校庭、8日は雨天のため体育館での実施となった。



図6 国分寺九小での実践(2022年度)

4 成果と課題

2年間の研究活動を通し、制約の中であったものの「ゆるスポーツ DeC ④」の可能性について実践を通して得られた。特に、発達障害の有無にかかわらず多くの児童にとってゆるスポーツが持っているコンセプトが実現していくことが、参加児童及び教師、保護者の感想等から伺えた。しかしながら、「ゆるスポーツ DeC ④」を体験したことによって運動することへの志向が高まったか否かについては、本研究においては検証しきれていない。特に、「学生とともに運動する」というフレームにおいて多くの児童が面白さを感じていたことも否めないだろう。「ゆるスポーツ DeC ④」の効果なのか、「学生とともに実施すること」の効果なのか、相乗効果があるのかなどについては、実施形態を工夫し比較検討していくことで今後明らかにできる部分はあるだろう。しかし、学生が教育支援の立場で児童と関わり、ともに「ゆるスポーツ DeC ④」を実施するという総体が、子どもたちを運動の世界に誘うという見方もできるであろう。本取組は、メディア等の目に留まり、広く活動内容を広めることもできた。例えば、大修館書店の体育科教育誌からの原稿依頼や世界文化社『発達支援 PriPri パレット』誌から取材を受ける等である。また、世界ゆるスポーツ協会代表の澤田智洋氏が出演したNHKの番組「あさイチ」(7月2日)において、開発された「ゆるスポーツ DeC ④」の競技名がパネルで紹介されることもあった。東京都スポーツ文化事業団からの依頼は、毎回参加してくれるリピーターの児童もあり、今後も引き続き受けていく予定である。

大学及び附属学校の教育・カリキュラムへの応用可能性としては、以下の通りである。本学は教員養成系の大学であり、将来教師になる学生にとっては、学習障害を有する児童への対応は直面する課題である。教育支援系の学生にとっては、学校を支援するという意味で、児童生徒、教師へのサポートのみならず、カリキュラムや授業内容レベルでの協働は直結する課題となるが、スポーツ開発と運営を通して両者がコラボレーションしながら研究活動を進めることで、お互いの立場を生かし合うことが体験できたと思われる。

また、本研究は附属との連携によって実施された。教育実習とは違う状況において、学生が附属教員とともに協働したことは、有意義であったと言えるだろう。また、公立学校において実践できたことも汎用性を検討する上で実績となった。特に1年次は、「ゆるスポーツ DeC ④」を実際に6年生が創るという実践に発展したことは大きな成果である。

課題としては、感染症拡大のため仕方ないことではあるが、公益財団法人東京都スポーツ文化事業団による都立学校活用促進モデル事業「ゆるスポ DeC 体験教室」が一回しかできなかったこと、延岡市教育委員会主催の体験教室も中止となった。また、教師に向けたゆるスポ DeC 実技研修会及び開発方法の研修会については、公開講座等では実施できなかったものの、調布第三小学校で児童とともに先生方にレクチャーする機会を得た。今後は、Explayground 事業における展開の可能性を模索するなど、持続化に向けて検討していくことを今後の課題とする。

研究成果の公表

- ・2022年2月「ゆるスポ DeC ④が体育・スポーツを変える!？」体育科教育、大修館書店第70巻第2号 pp.50-53 に実践の全容を報告した。
- ・2022年10月『発達支援 PriPri パレット』Pick up! 「勝っても負けても楽しめる! 発達障害に視点を当てたスポーツ開発」世界文化社 に実践の概要掲載予定。